

尾崎紅葉の中国種翻案小説『偽金』について

張 秀 強

一、『偽金』の創作経緯

尾崎紅葉は『偽金』という作品を、1902年（明治35年）1月1日『新小説』第7年第1巻に発表している。紅葉山人口述、尾崎徳太郎筆記と記してある。この作品の冒頭で尾崎紅葉は、この作品の創作経緯を語り、そして自ら中国種の翻案作、つまり『咫聞録』第九巻『嫁禍自害』から素材を取ったと明かしている。該当部分を以下のように引用する。

既に諸君の知らるる如く、昨年（明治33年、1900年——引用者注）四月の本誌（『新小説』——引用者注）臨時増刊「春鶯囀」に於て「茶碗割」と題して、北条団水の「昼夜用心記」の一章を取つて口演致しましたが、（中略）

彼の「茶碗割」は、頗る面白く出来て居るにも関わらず、当時在つた実話とも覺しからず、又は団水の立案とも受取り兼ねて、何ぞ種本が有るのでは無からう乎と、どうも然云ふ気が侵したので、実は私が疑つて居りました。（中略）

所が、猶且其が事実であるのを発見したのは、去年六月豆州修善寺の温泉に病養中、「咫聞録」と云ふ例の支那的奇話を集めた一帙の唐本を携帯して、日夕の無聊を慰めたのでありますが、其の第九巻に嫁禍自害と題する物語が載せてあります、是が全然「茶碗割」で、其裡に各幾分づつ作意の異つて居る処が、又夫々で面白い。

右の書には慵訥居士著として、自序は道光己丑と記してある。則ち我が文政十二年に当りますから、歿後百余年の団水が此本を見る訳も無ければ、又此本の話を開かう道理も無い。然らば「咫聞録」の方が受売かと謂ふに、先に疑つた通の次第で、どうも然うは考へられぬ。案ずるに、此話は古く支那に伝つて、或は既に先人の書に載つて居るのを、「咫聞録」が洗濯（引用者注：原文ママ）したのではなからう乎。不肖寡聞の為に其出所を指す事の出来ぬのは、甚だ遺憾であります。這種の書には往々然云ふ例が有る所から推して、先占権の団水には誠に気の毒の至りながら、自分は且く之を支那伝来の奇話と独断して措きます、同じ憶測ながら、団水を「咫聞録」が取つたと為るよりは、其方が妥当であらうと考へるのは、畢竟例の舶来臭有が為で、若又は是が吾が団水の筆華新発なる者であつたら、洵に之に勝る歡喜は無いのであり

ます。(下線引用者)⁽¹⁾

以上の創作経緯を見ると、この『偽金』という作品創作には、井原西鶴の一番弟子である北条団水(1663-1711)の話の原話考証の意味合いがあるように見受けられよう。尾崎紅葉は、北条団水の「昼夜用心記」の一章を口演した際、その話はどうも北条団水による立案のように見えないと疑問を抱き、それが後日偶然の読書発見で見事に自分の疑問が的中したということが分かり、興奮のあまりにその話の原話となった『咫聞録』第九卷『嫁禍自害』の漢文を自ら日本語の文章に翻案して冒頭の文章の後ろに証拠として付けて、自分のこうした学術的発見を公にしているのである。尾崎紅葉は少年時代に漢学者の石川鴻斎(1833—1918)に師事して漢文の素読を勉強したことがあり、その漢文の素養も高いことはいうまでもないことである。また、尾崎紅葉は明治34年(1901年)の日記「修善寺行」にも、「五月十日、十時過ぎより咫聞録を繙く」⁽²⁾、「五月十一日、雨繁く気甚だ寒し終日咫聞録を読む」⁽³⁾とあり、この読書を記録している。そして、同年5月12日中井錦城宛の書簡にも「一昨夜頃より今ははやまでと覚悟致し、携へ来り候咫聞録と申す怪譚の集を繙き、聊か消遣致し居候」⁽⁴⁾と書いている。ちなみに、中井錦城は元治1(1864)年～大正13(1924)年の新聞記者・随筆家である。

一方、尾崎紅葉が『茶碗割』の原話と認めたこの『嫁禍自害』という作品は、字数約1400字の短篇故事であり、その中国語原文は以下のようになっている。

嫁禍自害

嘉兴某典肆中，一日，有青衣輩数人，袍服整洁，侍从皆小艾。入肆，问有朱提几何，答曰：“若有物质，不拘多寡，具质之，奚必问资数也？”其人去。

移时，舁一筐至。延之入，启视之，皆黄金所制重器，灿烂耀目，约值不啻万金。对肆人而言曰：“此乃某府之物，缘主人有要需，欲质银三千。”肆人知若府之有是物也，允其质，而如数书券，平金交讫。既去，细视之，乃银胎而金衣也，然已无及矣。

肆中定议，凡质伪物而亏其本，摊偿于肆中执事人。此物亏金过多，而执事修工无几，即终岁停支，非十余年不能清此赔项。而依肆度活者，家口赖何养贍？咸皆瞪目呆痴。肆主出，见众执事之形，问之，具以情告。肆主亦以赔金数多，不能令其枵腹从事。因念彼以伪物诳金，必不来赎，乃生一计，令各执事不许声张，命另书伪券，密弃诸途，俾行路者拾之，必将利其中之所赢，而具资以赎焉，则嫁祸于人矣。

早起，有某生赴市，拾焉。视券中之质本甚大，意必贵介所遗，若赎而鬻之，获利必厚。无如家仅鲋口，并无余资，遂欣欣然谋诸亲友。咸皆念某生平日之清正谦和，乐与凑银以赎，使之得利，以丰其家，均皆允诺。生邀亲友同至肆中，持券向问，请开筐以视。肆中人曰：“当仅两日，即来看物，足下宁能买此券乎？”曰：“然。”肆中人即发筐陈示，且炫称物之贵重，以款动之。归即凑三千金与生，生加子金，依券赎回。载而鬻诸五都之市，历视数家，俱曰伪金，竟无售主。

砍而验之，乃白金为胎，外裹黄金许厚，计所值不过数百金。某生计鬻以肥家，今倾家不足以偿贷，号哭而回。

次早，徘徊河干，赴水觅死。忽有过而问者曰：“子非贖伪金者乎？”曰：“子何以知之？”曰：“吾见子之形而知之也。子即回家，携所贖伪金，随我而往，必获偿子之资，毋戚也。我在此候汝，然勿令人从而来。”生思贖伪金，死也；不贖，亦死也，不如即并其伪而弃之，因从其言，回家携伪金而从，听其所为。

携生同登小舟，行一昼夜，其人先登岸。入门有顷，数人出，向舟揖生登舟，引进其门。见堂高数仞，廊庑华丽，盖即向当质金之家也。舁进质物，验视无讹，谓生曰：“子之累不少矣。”设宴款待，留数日，计偿质及子金外，又赠资斧，遣之归。生于是得无苦。

不数日，前青衣者，忽挟资持券，至某肆中，取所质物。肆中大惊，肆主无策可解，愿受罚赔，丧资数万，乃完其事。肆中资本一空。肆主曰：“吾怜众执事之不能受此重赔，而设此计也，谁知自拆其肆，此亦数也。”付之一叹而已。

后逾年，金陵某典肆，亦有质伪金器，一如禾中故事。肆主曰：“禾中肆欲脱已害而陷人，其心尚可问乎？不如隐忍焉，其失也犹小。”既而密歸金匠，仿其物而为之，轻重大小，一如所质，无少差异。越月始成。因告于众曰：“某质伪金，丧本已多，是物恰可以伪乱真，然难逃识者之目。与其见是物而歎歎，不如毁此物而免害。”约某日携赴报恩寺，邀郡中各肆商，同往观之。众商阅毕，即炽火于鼎而冶熔之。众商不知其计也，郡中喧传其事。质金者闻物已毁，心起讹诈，具资持券来购。肆中人装若慌张，执券故为迟迟，质金者逼其平银而纳诸柜。须臾，举篋舁之，质者再四熟认，丧气而去。

吁！同此一辙之事也，同设计以沽其害，一以丧肆，一得安全，盖视其心之正不正耳。天下欲嫁祸于人者，不至害人性命，或可幸而免尔；若欺人以贪，而设陷阱，彼堕术者，几至身家不保，冥冥中岂无照鉴在兹乎？况禾商之计，只顾目前，未曾虑及事后，此下愚之智，祸之旋踵，已早见之，何足为诈也？若金陵之商，可谓譎而不失其正，是真诈也已矣。⁽⁵⁾

さて、尾崎紅葉は実際にこの『嫁禍自害』という中国故事をどのように和訳し、翻案しているのか、その翻訳と翻案には原作とどのような相違があるのか、先行研究では土佐亨は『偽金』（「新小説」七年一卷、明治35年1月）は、翻案文が中国の小説であることを明示している唯一の紅葉作品で、しかも原拠が清代の怪談奇譚の集『咫聞録』巻九の『嫁禍自害』であること、ならびに原典の繙読が、前年の豆州修善寺温泉での病養中であったことは、紅葉自身が本文最初に述べている。これらの事実を考察した上で、「『偽金』は『嫁禍自害』を口演体に改めたもので、事件の中味に入りはなく、大体忠実に原文を追っているが、話を採り上げる態度は根本的に異っている」と『偽金』と『嫁禍自害』との最大の違いを指摘している。

また、『咫聞録』全体の傾向である談奇性が豊富であるにもかかわらず教訓性を主意にしている点につき、『嫁禍自害』も例外ではないと主張し、「自分にふりかかった禍を他人に転嫁し、人を迷

わせ不幸に陥しいれようとしても、それは不可能であるばかりかかえって自分が大失敗する」といった『嫁禍自害』の主旨を反映する語句を尾崎紅葉は翻案の際に意図して省略したところや、最終的な失敗で破産した店主が「これも運命である」というふうに洩らしていることばも省略しているところに着目し、「紅葉は運命の帰結として話を綴ってはいない。原文末尾の「祇だ目前を顧て、未だ曾て事後に慮り及ばず、此下愚の智……」のみを書き下して終わることによって、善悪のもたらした運命という原話を、賢愚の差のもたらした状況という合理的な話に変えてしまっている」と分析している。そして、論文の末尾で尾崎紅葉が「原話の運命性・教訓性を、能力技巧の問題に置換して合理化するところに、明治の時代性と紅葉の都会人的性格を見ることができよう。」⁽⁶⁾と総括しているが、より詳細な論証はしていない。以下、『偽金』の日本語文章と『嫁禍自害』の中国語原文とを比較しながら、『偽金』翻案における尾崎紅葉の創意工夫に焦点を当て論を進めるつもりである。

二、『偽金』翻案における尾崎紅葉の創意工夫

尾崎紅葉が慵訥居士の『嫁禍自害』を『偽金』に翻案する際の創意工夫を考察するために、まず『嫁禍自害』の冒頭部分を例に取り上げて論証するが、以下の付表引用文を見てすぐ分かるように、慵訥居士の原文『嫁禍自害』では僅か68文字の内容が、尾崎紅葉の『偽金』となると、まず文字数が344字と大幅に膨れ、段落数も一段落から三段落にまで「水増し」が実施されている。また、原文第二段落は、文字数112字であるのに対して、翻案の『偽金』では三段落、509文字の規模拡大になっている。

『嫁禍自害』『偽金』対照一覧表 I

中国語原文第一段落 『嫁禍自害』	日本語の翻案 『偽金』
嘉兴某典肆中，一日，有青衣輩数人，袍服整洁，侍从皆小艾。入肆，问有朱提几何，答曰：“若有物质，不拘多寡，具质之，奚必问资数也？”其人去。	<p>嘉興県の或典肆に、何処から来たものか、然るべき屋敷勤の腰元衆と見ゆる女達数人、供には多くの女童を従へ、咸も美々しき服装で、繚々と遡り込んだから、肆の者は驚きました。</p> <p>御用の儀は、と謹んで何ふと、此方には元手の銀は約そ何程用意致し居ります乎、聞かせてくれますやうに、と大束なこと夥しい。何に為る、行列で質入に来る勢であるから、是くらゐの見識は有るのが当然かも知れぬが、肆の者は呆れた。</p> <p>手前共も渡世の儀で御座りまする故、御用仰せ付けられ次第、如何程なりともお引受を致しまするで、お客様方は決して然様な御念に及ばず、お品物さへご持参に相成りましたら、宜きやうに御取計を致しまするで御座ります、と実は手代も這些か中腹です。すると、ああ、然やうなれば、後刻頼みまずぞ、云ふので行列は一先引ひきました。</p>

(『紅葉全集』第八卷(東京:岩波書店,1994)に収録された尾崎紅葉の小説『偽金』と『咫聞録』(重庆:重庆出版社,2005)に収録された慵訥居士の『嫁禍自害』を参考にして筆者が作成。)

『嫁禍自害』が『偽金』に翻案されたあとの文字数の増量は一目瞭然であるが、もっと一文一文確認していくと、日本語の『偽金』にはまず「肆の者は驚きました」と原文にはない店の者の反応が入れている。また、「青衣輩数人、袍服整洁、侍从皆小艾」の対訳に当たる「何処から来たものか、然るべき屋敷勤の腰元衆と見ゆる女達数人、供には多くの女童を従へ、咸も美々しき服装で、繚々と遡り込」むという日本語表現からは、来客がどこから来たか不明なこと、来客は屋敷勤めの可能性があること、服装華麗なことなどの情報が添加され、人物描写が原文より細やかに行われていることが分かる。それから、『嫁禍自害』の来客が「入肆、問有朱提几何」という簡潔で唐突な質問表現なのに対して、『偽金』ではまず店の者が来客に「御用の儀は、と謹んで伺ふ」と処理し、その後ろに来客の「此方には元手の銀は約そ何程用意致し居ります乎、聞かせてくれますやうに」という回答が来る。つまり、原文では一問に過ぎない簡略な文章が、翻案では一問一答という会話表現に増幅されているということである。しかも、その会話表現の直後に「大東なこと夥しい」と来客の態度の大きさに関する描写があり、さらにその描写の後ろで「何に為ろ、行列で質入に来る勢であるから、是くらゐの見識は有るのが当然かも知れぬが、肆の者は呆れた」と来客の態度が大きい原因と店の者が驚いた原因も分析されている。

小説『偽金』と比べて、原典『嫁禍自害』の場合、店の者が客に「有朱提几何」（元手の銀をいくらぐらいお持ちでしょうか）と唐突に聞かれて、「若有物质、不拘多寡、具质之、奚必问资数也？」と答えた。つまり「換金したい物があるならば、多かれ少なかれこちらはすべて対応するのに、何で元手の銀までをいちいち聞くんだ」と、これは突っ張るような答え方である。それに対して、『偽金』の場合は、「手前共も渡世の儀で御座ります故、御用仰せ付けられ次第、如何程なりともお引受を致しまするで、お客様方は決して然様な御念に及ばず、お品物さへご持参に相成りましたら、宜きやうに御取計を致しまするで御座ります」と答え、「手代も這些か中腹」というところから、店の者も来客の無礼にやや慥然となっていることが分かる。ところが、手代の言葉遣いを見ると、来客に対してちゃんと「御用仰せ付けられ次第」や「然様な御念に及ばず」や「お品物さへご持参に相成りましたら」のように、尊敬語で対応している。それから、自分のことを言う場合に、「お引受を致します」「宜きやうに御取計を致しまするで御座ります」というように、謙った謙讓表現を使用している。この敬語表現が、原文『嫁禍自害』の「奚必问资数也」という反論するようなきつい語調を和らげる役割を果たしていると言えよう。しかし、たしかに言語上の表現が丁寧なわりには、手代という店の者が暗にやはり来客の無礼を無礼で返している形だから、そのあと中国語原文には見られない「ああ、然やうなれば、後刻頼みますぞ」という来客の脅かすような応答を尾崎紅葉が創作で入れたのは、さすがに文豪の妙味だと頷けよう。下表は第二段落についての対照比較である。

『嫁禍自害』『偽金』対照一覧表Ⅱ

中国語原文第二段落 『嫁禍自害』	日本語の翻案 『偽金』
<p>移時，昇一篋至。延之入，目視之，皆黄金所制重器，灿烂耀目，约值不啻万金。对肆人而言曰：“此乃某府之物，缘主人有要需，欲质银三千。”肆人知若府之有是物也，允其质，而如数书券，平金交讫。既去，细视之，乃银胎而金衣也，然已无及矣。</p>	<p>時を移して、一篋を昇して至るとあるから、今度は好い御客と、肆中懸つて敬ひ奉り、作速御品を拝見と、啓いて之を視れば、皆黄金所製の重器、燦爛として目に耀き、約そ値啻に万金ならず、是は是は、福德の三年目と、手代共は喉を鳴して喜んだの喜ばぬのではない。</p> <p>時に重立つた腰元の言ふには、是こそ某家に無くて叶はぬ相伝の重宝、固より門外不出の御品なれど、此度折入つて殿様御入用の金子、表向には如何にも御都合遊しかね、無抛銀三千両に御質入被成度御内意承はりて持参したれば、是にて何分右の金子用違くれまじきやとの言。</p> <p>些と睨んだばかりで、値万金も啻ならざる代物を、単の銀三千と云ふのであるから、手代共は愈々歡天喜地。其れも出処の知れぬ代物であつたら、這麼法外の安直を言れて見ると、胡散臭いと考へも為やうが、兼而其の某家の重宝に此物有りと知つては居るし、且置主が行列で遡り込む始末であるから、的然大名質の太裕なのと、毫末の懸念にも及ばず、一応は品物吟味の上、金子を渡し、掟の通貨物預の一札を通して返しました。其後で段々品物を調べて見ると、さあ、事だ！乃ち銀胎にして金衣也とあるから、是が銀台の天麩羅。呀と言つた限で、手代共は蒼く成つて了つた。</p>

(『紅葉全集』第八卷(東京:岩波書店,1994)に収録された尾崎紅葉の小説『偽金』と『咫闻录』(重庆:重庆出版社,2005)に収録された慵訥居士の『嫁禍自害』を参考にして筆者が作成。下線は原文のまま。)

第二段落では、冒頭一文の「移時，昇一篋至」は「時を移して、一篋を昇して至る」と忠実に翻訳されているが、続く「延之入」という文、つまり「来客を店の中に案内し」という意味のところは、「今度は好い御客と、肆中懸つて敬ひ奉り」と加訳され、店内の者が皆来客を大切にしているという情報添加が行われている。「皆黄金所制重器，灿烂耀目，约值不啻万金。」という内容に対する対訳文は「作速御品を拝見と、啓いて之を視れば、皆黄金所製の重器、燦爛として目に耀き、約そ値啻に万金ならず、」となっていて、ほぼ忠実な翻訳と言える。ただ、「是は是は、福德の三年目と、手代共は喉を鳴して喜んだの喜ばぬのではない。」と予期しない幸運に恵まれた手代の狂喜ぶりは原文には表現されていないところである。この後の換金過程にも尾崎紅葉の情報添加が多少見られる。いちいち羅列は控えるが、ほぼ中国語の内容どおりに叙述していると言える。第二段落末文の「既去，细视之，乃银胎而金衣也，然已无及矣。」の「其後で段々品物を調べて見ると、さあ、事だ！乃ち銀胎にして金衣也とあるから、是が銀台の天麩羅。呀と言つた限で、手代共は蒼く成つて了つた。」という日本語対訳と比較すると、原文の淡々とした叙述に対し、尾崎紅葉の文章は「さあ、事だ」「呀と言つた限で、手代共は蒼く成つて了つた」という臨場感のある生き生きとした場面描写があり、原文より物語性を豊かに持っていると言えよう。

如上のように、より細部の比較を施すことによって、尾崎紅葉が中国故事『嫁禍自害』を『偽金』

に翻案する際、どういうところで素材を加え、内容を変えていたかがわかる。『嫁禍自害』の第一、二段落と『偽金』の相当する段落を比較した限りでは、以下のような尾崎紅葉による創意工夫が見られる。つまり、(1) 会話文をたくさん取り入れていること。(2) 作中人物の心理分析を丁寧にしていること。(3) 場面描写を細かくしていること。(4) 話の場面性を重視していることである。当然、この創意工夫は『偽金』の「口演」という性質と関係していると思われる。「口演」をする時、尾崎紅葉は常に聞き手の反応を意識し、話題への参入へ巻き込むようにしなければうまく話し手にはならないからである。したがって尾崎紅葉は、叙述体の漢文を日本語の文章に直訳する手法を取るのではなく、語り手が物語の最中に自ら顔を出して補足説明をしたり、聴衆と共同で物語りの先行きを推測したり、滑稽な会話を入れたりしているのである。このような創意工夫は、舞台劇効果を生み出している一方で、過剰気味の会話の滑稽さが原典の説教と教訓の色合を抑圧し、作風を一変させたとも言える。

たとえば、偽の黄金をうっかり買ってしまい「恐々縮々」の手代共に対し、主はまず彼らを安心させ、自ら「質物預の偽手形を一つ拵へて、窃と途に棄てて置く」というアイデアを披露した後、主と手代の会話は以下のようにになっている。

『嫁禍自害』『偽金』対照一覧表Ⅲ

中国語原文 『嫁禍自害』	日本語の翻案 『偽金』
<p>因念彼以伪物诳金，必不来赎，乃生一计，令各执事不许声张，命另书伪券，密弃诸途，俾行路者拾之，必将利其中之所赢，而具资以赎焉，则嫁祸于人矣。</p>	<p>「這麼大騙を為て行き了つた事だから、どうで奴等の質受に来やう気遣は無い。だに因つて、私の工夫と云ふのは其処に在るので、那の質物預の偽手形を一つ拵へて、窃と途に棄てて置くのだな。」</p> <p>「すると如何致します。」</p> <p>「誰か拾ふだらうが。」</p> <p>「それは拾ひませうで。」</p> <p>「拾つたら何為ると想ふ。」</p> <p>「屹度啓けて見ますで御座います。」</p> <p>「見たら何為ると想ふ。」</p> <p>「へい。」と言つたが、誰も其後を答へる者が無い。</p> <p>「それ見ろ！其通智慧の無い手合ばかり揃つて居るから、這麼甘手を吃ふのだ。好く聴きなさいよ、誰か拾つて啓けて見たら、先づ品書を読むわ、而して品物の宏大なのに驚くわ。それから何を讀むと想ふ。」</p> <p>「質入の金高で御座いますかな。」</p> <p>「知れた事だ。然して奈何考へると想ふ。」</p> <p>「定めて是は安い物だと考へませうな。」</p> <p>「知れた事だ。それから先は何と考へる。」</p> <p>「質商などと云ふ者は、贏利の暴いものだとでも考へませうかな。」</p> <p>「馬鹿を言へ！」</p> <p>「へい。」</p> <p>「ええ、私の考へますするには、」</p>

「ああ、お前か、何と考へます。」
 「恁云ふ大質を入れる人は、能く能く謂ふに謂れぬ切ない身の上なのであらうに、又此の手形を遣しては、然ぞ大騒をして居る事だらう。嗚呼気毒な、奈何かして届けて遣りたいものだ……………」
 「誰が然う想ふのだ？」
 「へッ、拾ひました人が。」
 「馬鹿を言へ！！那樣了簡でお前方はな、此の質屋渡世で一日でも飯が食へると思ふのか。孔孟の道や行はれざる久矣だ、当今の世間様はなかなか那樣無欲ではないわ。」
 「へッ、実の所私は然うは考へませんので御座います。先づ銀三千で入れて在ります品が、些と贖けさへ致しましたら、右から左へ一万やそこらは濡手で粟と云ふ仕事なので御座いますから、其儘券を着服して、是から七処に那裡等中を駆廻ります。」
 主は聞くと喜の眉を抜いて、
 「其処だて！借金を質に置いて、是は贖け徳だ。俺でも贖ける！」
 「いいえ、私が贖けます！」
 「先づ之を一つ贖けた日には、生涯懐手の一夜大尽。」
 「其処です！有難い！！」
 「お前が拾ふのではない！」
 「誰が拾ひませう！」
 「誰が拾ふか、解るものか。」
 「拾つた奴は……………大した災難で御座います。」
 「其処が禍を転じて福と成すのだ。」
 「なあ……………程！」
 執事人一同舌を捲いて感服したのであります。儲計は密なるを尚ぶ、咸も此事口外無用と、一面には、簡の偽物質を取つた事は堅く秘し、又一面には、作速彼の預手形の偽券を書いて、其夜の中に往来劇い町通へ持つて行つて罍を掛け置きました。(下線引用者)

(『紅葉全集』第八卷(東京:岩波書店,1994)に収録された尾崎紅葉の小説『偽金』と『咫聞録』(重庆:重庆出版社,2005)に収録された慵訥居士の『嫁禍自害』を参考にして筆者が作成。下線は筆者によるもの。)

如上の一覧表で分かるように、『嫁禍自害』では、「因念彼以偽物誑金，必不来贖，乃生一計，令各執事不许声张，命另书伪券，密弃诸途」という叙述体で公開される主人の計略は、『偽金』では「這麼大騙を為て行き了つた事だから、どうで奴等の質受に来やう気遣は無い。だに因つて、私の工夫と云ふのは其処に在るので、那の質物預の偽手形を一つ拵へて、窃と途に棄てて置くのだな」と会話文の形で登場するのである。そして、そのすぐ後に延々と繰り返される「すると如何致します。」「誰か拾ふだらうが。」「それは拾ひませうで。」「拾つたら何為ると想ふ。」「屹度啓けて見ますで御座います。」「見たら何為ると想ふ。」という質問攻めのような受け答えは、当然のことながら、文章簡潔な『嫁禍自害』には一切出していない。しかも、尾崎紅葉の場合は、「見たら何為ると想ふ。」と出した質問に、返ってくる回答に「知れた事だ」「馬鹿を言へ」というふうで否定することによって、聞き手の好奇心を引いている。このあたりからは尾崎紅葉の講演者としての創意工夫が最も

はっきりと現れていよう。

もっとも、尾崎紅葉がなぜこの口演をするかということについては、明治32年(1899年)12月18日「読売新聞」に掲載された「新年後の読売新聞」中の予告文が一つの回答となろう。

口演百譚

日本人が兎角話下手にて品善くして趣味ある物語を談ずるの習なきを憂ひ茲に学者講演会とも称すべきもの起り其の発会の席上坪内逍遙の『ソクラテス』、巖谷小波氏の『架空旅行』、長田秋涛氏の『大那翁の臨終』、尾崎紅葉氏の『短慮の刃』等二十世紀の講談ありたり本社は乞うて之を読売新聞に連載し猶第二回以後諸大家の百譚に及ぶべし⁽⁷⁾

この予告文に登場する尾崎紅葉の講演は『偽金』ではなく『短慮の刃』であるが、しかし、スタイルとして同じ講演であるから、その目的とするところは大差はなからう。つまり、尾崎紅葉は『偽金』を通して、「話下手」の日本人に、「品善くして趣味ある物語を談ずる」習慣を自らの講演を通して身に付けさせるという意図があるのである。このような目的は『偽金』の話が説理性と教訓性を重んじるというのではなく、話の娯楽性を重んじる性質を導いたのだと言えよう。

しかしながらこのように全体として加訳と情報の添加が多く見られる尾崎紅葉の『偽金』において、わずか数箇所ながら明白な不訳、つまり原文情報の削除と省略が見られた。関連の不訳は以下のような場面である。

『嫁禍自害』『偽金』対照一覧表Ⅳ

中国語原文 『嫁禍自害』	日本語の翻案 『偽金』
<p>不数日、前青衣者、忽挟资持券、至某肆中、取所质物。肆中大惊、肆主无策可解、愿受罚赔、丧资数万、乃完其事。肆中资本一空。肆主曰：“吾怜众执事之不能受此重赔、而设此计也、谁知自拆其肆、此亦数也。”付之一叹而已。</p>	<p>話次分頭、それから数日の後彼の質主は前の同勢で、又忽然として件の典舗に入つて来たから、手代共は見ると肝を潰した。化物が頭れたのよりは、此方が余程可懼いに違無い、奈何なる事かと皆手に汗を握つて居ると、正物の一札に元利を添へて、其へ並べ、さあ那品をと云ふので、舗中は顛覆るやうな騒擾。這奴巧取の上盛を吃つたわいと、見す見す鼻の前に盗人を置きながら、手出しも成らぬばかりか、未だ此上に踏んだり踢たりの目に遭せられるのか。無念や、業腹やと、心の内では歯咬をしても、情無い事には、肝心の玉が無いのだから、何とも其場の言訳が立たぬ。今は是非には及ばぬ所と覚悟した重手代、其へ進出て、盗人の前に低頭平身して、実は甚だ申兼ねました次第ながら、偽券を掴まされて恠々箇様と、急拵の苦い口上を述べて、重々詫入つたが、固より其分に済まう筈が無い。典舗の落度であるから、掟に従つて罰賠を受ける事に成つたが、天下に二有るべからざる御家の重宝と云ふ勿躰で、なかなか純金製と見積つた価などで勘辨を為るのではない、摺つた揉んだの談判の末、貲を喪ふこと数万、乃ち其事を完うすれば、肆中の資本一空、憐むべし、彼の典肆は此の一件の為に敢無く分散して了ひました。瞞される事を、一杯吃ふと謂ひますが、是は立続に二杯吃つたので、賊</p>

の方では、初手から此の二杯目を盛り付ける巧ではなかったのを、被害者の為す所に応じて計を出す、其の電撃風発の機智、変幻自在の新手、既に是だけの立案でも「昼夜用心記」の好材料たるのでありますが、此先が例の「茶碗割」の本文になるのであるから、一層面白い。(下線引用者)

(『紅葉全集』第八卷(東京:岩波書店,1994)に収録された尾崎紅葉の小説『偽金』と『咫聞録』(重庆:重庆出版社,2005)に収録された慵訥居士の『嫁禍自害』を参考にして筆者が作成。下線は筆者によるもの。)

上に挙げた『嫁禍自害』の下線部のほうの「肆主曰:“吾怜众执事之不能受此重赔,而设此计也,谁知自拆其肆,此亦数也。”というあたりは、『偽金』の中では、まったく取り上げられていないのである。なぜ省略されているかについて、前掲の土佐亨の論文では、「紅葉は運命の帰結として話を綴ってはいない。」とし、『偽金』は、「かけられたペテンをまたペテンによって報復するという二重三重の巧智の錯雑が興味の焦点」だからだと分析されており、同感できる指摘である。つまり、尾崎紅葉が着目しているのは、騙す人がさらに騙されるという話の滑稽さであり、またその話の間に現れる人間の智慧の競争なのである。

そのかわり、『偽金』の下線部文章は『嫁禍自害』にも見られないものである。『偽金』の下線部文章は、語り手の尾崎紅葉が物語りの最中に顔を出して、自作「茶碗割」と団水作の「昼夜用心記」と『咫聞録』の説話である『嫁禍自害』と三者の伝承関係を説明する場面である。当然のことながら、中国故事にはこのような話が出るはずがない。

『嫁禍自害』『偽金』対照一覧表V

中国語原文 『嫁禍自害』	日本語の翻案 『偽金』
<p><u>吁同此一辙之事也。同设计以沽其害,一以丧肆,一得安全。盖视其心之不正耳。天下欲嫁祸于人者,不至害人性命,或可幸而免尔。若欺人以贪,而设陷阱,彼堕术者,几至身家不保。冥冥中岂无照鉴在兹乎。况禾商之计,祇顾目前,未曾虑及事后,此下愚之智,祸之旋踵已早,何足为诈也。若金陵之商,可为譎而不失其正,是真诈也</u></p>	<p>慵訥居士曰く、禾商之計(禾は地名)は祇だ目前を顧て、未だ曾て事後に慮り及ばず、此下愚の智、禍の踵を旋す已に早し、之を見るに、何ぞ詐と為すに足らんや、金陵之商の如きは、譎を為して、其正を失はず、是真の詐なるべきなる已矣、(下線引用者)</p>

已矣。

(『紅葉全集』第八卷(東京:岩波書店,1994)に収録された尾崎紅葉の小説『偽金』と『咫闻录』(重庆:重庆出版社,2005)に収録された慵訥居士の『嫁禍自害』を参考にして筆者が作成。下線は筆者によるもの。)

ここまで対比しながら、まとめてきたが、全体的に考察すると、結びの段落での尾崎紅葉による「不訳」が最も著しく、中国語原文の「况禾商之計，祇顧目前，未曾慮及事后，此下愚之智，禍之旋踵已早，何足为詐也。若金陵之商，可为譎而不失其正，是真詐也已矣。」というところをほぼ忠実に丁寧に日本語に翻訳しているのに対して、「吁同此一轍之事也。同设计以沾其害，一以喪肆，一得安全。盖視其心之正不正耳。天下欲嫁禍于人者，不至害人性命，或可幸而免尔。若欺人以貪，而设陷阱，彼墮術者，几至身家不保。冥冥中岂无照鉴在兹乎。」という百字に近い原作者の慵訥居士の総括に尾崎紅葉はまったく触れなかったのである。この総括の言葉は、中国語原文にとっては、むしろ話の靈魂にあたるところで、前述したように、尾崎紅葉は話の説教性を嫌い、あくまで話の滑稽さを前面に出そうとして、それを敢えて省略したのであろう。

以上のように、尾崎紅葉の中国種翻案の一事例として、『偽金』と中国語原作の『嫁禍自害』について比較してみた。まとめて見ると、尾崎紅葉の翻案作『偽金』は、中国語原作の『嫁禍自害』と比べて、会話文をたくさん取り入れていること、作中人物の心理分析を丁寧にしていること、場面描写を細かくしていること、話の場面性を重視していることなどの特徴が見られる。こうした心理描写、会話表現、場面描写の工夫を通して、尾崎紅葉は単に中国語原作の『嫁禍自害』の面白さを紹介するのではなく、むしろ原作に存在する「勸善懲悪」の善悪観から一定の距離を置き、旧善悪観からの脱出の試みをしたとも言えよう。このようにして、尾崎紅葉は中国古典文学の素材をも彼の文学創作に織り込み、創作上の実験をしているのである。今まで尾崎紅葉の翻案についての研究の対象は主として、尾崎紅葉が涉獵した西洋の書物であった⁽⁸⁾。本論文はそうした西洋書物の翻案に注目が偏っている研究現状における一つの試みだと言えよう。

注

- (1) 尾崎紅葉. 紅葉全集第八卷. 東京:岩波書店, 1994. 216-217.
- (2) 尾崎紅葉. 紅葉全集第十一卷. 東京:岩波書店, 1995年. 79.
- (3) 尾崎紅葉. 紅葉全集第十一卷. 東京:岩波書店, 1995. 80.
- (4) 尾崎紅葉. 紅葉全集第十一卷. 東京:岩波書店, 1995. 117.
- (5) 慵訥居士. 咫闻录. 重庆:重庆出版社, 2005. 177-179.
- (6) 土佐亨. 紅葉細見 雑考四篇. 文芸と思想, 1973(2): 50.
- (7) 尾崎紅葉. 紅葉全集第八卷. 東京:岩波書店, 1994. 505. 解題を参照.
- (8) 例えば、尾崎紅葉と外国文学との影響関係の研究結果として、実証的な考察で論を進めた堀啓子の著書『和装のヴィクトリア文学: 尾崎紅葉の『不言不語』とその原作』(東海大学出版会、2012)や、酒井美紀の著書『尾崎紅葉と翻案——その方法から読み解く「近代」の具現と限界』(花書房、2010)などが挙げられる。前者の場合は、尾崎紅葉の傑作のひとつとされる『不言不語』(1895)の原作として、米国の通俗

小説であるパーサ・クレイの「Between Two Sins」だとつきとめているのに対し、後者の場合は、デカメロン、モリエール、エミール・ゾラ、アラビアン・ナイトというように、全般的に尾崎紅葉と西洋文学の結びつきを論じたものである。

執筆者プロフィール

張秀強、広東外語外貿大学日本語学部准教授、成蹊大学客員研究員。研究分野は日本近代文学。本論文は、中国・上海理工大学のシンポジウム（2015年5月）の際に口頭発表したもので、著書『尾崎紅葉文学研究』（北京：人民出版社、2015年8月）の一節を、一部修正し、加筆したものである。本研究は2014年度「広東省高等教育創新強校工程」項目（GWTP-BS-2014-07）の支援を受けた（Supported by Innovative School Project in Higher Education of Guangdong, China）。また、2015年度教育部人文社会科学研究青年基金「中日比較文学視域下的尾崎紅葉文学研究」（項目批准号：15YJC752045）の助成を受けている。